

雉岡城について

雉岡(「きじおか」・「きじがおか」)城は本庄市児玉町^{はちまんやま}八幡山にあり、旧字雉岡の地名をとって付けられた城で、小丘陵上に築かれています。別名を八幡山城ともいいます。15世紀頃に築かれたものと思われ、^{かんとうかんれい}関東管領山内上杉家・後北条家・松平家と城主を替えて江戸時代の初め頃まで使用されました。

雉岡城は旧児玉町の市街地北西部に築かれており、城の南側を東西に鎌倉街道上杉道が、東側には鎌倉街道本道の^{かみつみち}上道が南北に通る、その二つの街道の分岐する内側に立地しています。



雉岡城の築城は「上野国志」という書物によれば、「山内上杉氏が築いたが地形が狭いために上州の平井城に移り、家臣の有田豊後守定基を置いて守らせた」とあります。この有田定基は当時上野国藤岡城主でしたが、これ以後、雉岡城主となりました。この時に姓を夏目と改めたといひます。夏目定基とその子^{さだもり}定盛の二代が城主でした。その後、小田原北条氏が武蔵国に侵攻し、^{のりまさ}関東管領上杉憲政は越後の長尾景虎(上杉謙信)を頼って逃げ、雉岡城も後北条氏の城となりました。

永禄4年頃(1561年頃)に小田原城主北条氏康の三男北条安房守氏邦が鉢形城(寄居町)主となり、現在の秩父郡・大里郡・児玉郡を支配するようになりました。しかしその間は度々武田信玄や上杉謙信軍の侵攻を受け、その支配は安定しませんでした。天正10年(1582年)に起きた神流川合戦以後、^{よこちさこんたはる}児玉の地は完全に北条氏邦の支配下に入り、氏邦は家臣の横地左近忠晴を雉岡城の城代として派遣して守らせました。

天正18年(1590年)に豊臣秀吉が小田原北条氏を攻めるため軍を進め小田原城を囲むと、豊臣方の北国勢(前田利家・上杉景勝軍)^{かげかつ}の侵攻を受け、城代横地忠晴は大軍に恐れをなして鉢形城に逃れたといひます。雉岡城は間もなく落城をしました。

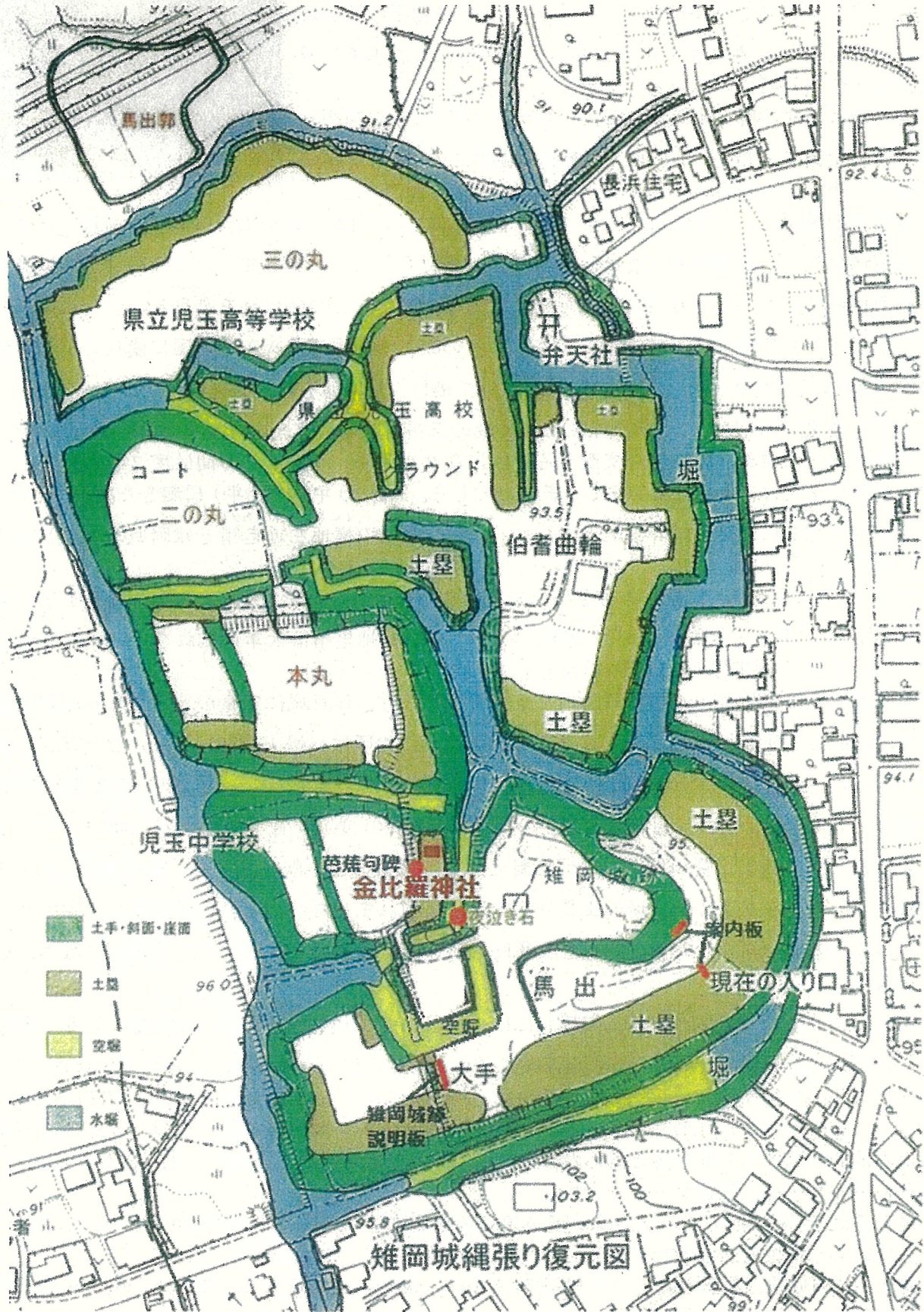
小田原北条氏の滅亡後、関東は徳川家康の支配となり、江戸城に家康が入り関東の体制を整えるため、家康は一族の松平清宗・家清父子に雉岡城(この頃は八幡山城といった)と一万石の領地を与えました。清宗は八幡山城で新領地の支配を始めましたが数年で死去し、嫡男の^{げんばのかみいさよ}玄蕃頭家清が跡を継ぎました。しかし関ヶ原合戦の翌年の慶長6年(1601年)には家清は合戦の勲功により3万石に加増されて^{みかわ}三河国(愛知県)吉田へ^{てんぼう}転封となり、児玉の地を離れました。城は^{はいじょう}廢城となり建造物等は取り壊されたようで、城の土塁や堀などは残されましたが、跡地は領主持ちの御林となりました。江戸時代後半には城内は開墾され農民に払い下げられ堀は田になり、^{くるわ}曲輪などは畑になったようです。

江戸時代の地誌『新編武蔵風土記稿』には「城は山により南を首とし、北を尾とする。東西北の三方はすべて堀を構え、南の一方のみ平地に続き、この所に大手口あり。大手の前に馬出し跡あり。大手を入り山を登り本丸に至る。この所は山上の平地なり。ここより乾(北西)の方に行ってから堀あり、その西に二の丸曲輪あり、それより北へ降りて三の丸へ至れり。この二・三の丸の隅に丸馬出の跡あり。すべて城中構え構えの土手(土塁)今に依然たり。これより東へまわりて大池あり。城中の固めとせり」と書かれています。

現在では、明治時代に三の丸一帯が児玉高等女学校(現在の児玉高校)の敷地となり、その後、本丸から二の丸一帯は児玉中学校の敷地となり、城の遺構の多くが失われています。

現在、雉岡城跡は埼玉県指定文化財(史跡)となり、城内には大規模な土塁や堀が残されており、多数の桜が植えられ市民の大切な憩いの場となっています。

雉岡城の概要



(図の上が北です。)